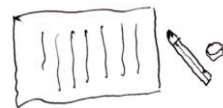


12年の歳月をこえて…

よみがえった「平和と人権」の願い



今年5月のある日、フォーラムのパソコンに思いがけないメールが届いていた。2002年におこなわれた「第21回平和と人権を考える作文コンクール」の入賞作品がもし保管してあったら送ってほしいという内容であった。

その当時は、フォーラムの前身である群馬県高校教育研究所の時代である。研究所の大きな活動の中で、毎年県内の高校生に呼びかけて「平和と人権を考える読書感想文・作文コンクール」を実施していた。あさを社との共催だったので、優秀作品は『上州路』にも掲載された。

フォーラムのロッカーを捜してみると、「平和・人権部会」の棚に手作りの『研究所ノートNo.19』と『上州路』がちゃんと保管されていた。早速、送ったところ、次のようなお礼の手紙とお菓子をいただいた（当時のコンクール担当の女屋定俊さんも別便で送って下さっていた）。そのお手紙の一部を紹介したい。

当時高校2年生だった私は、現在28歳になり、子どもが2人います。子どもが小学校に上がり、「いじめ」や「人権」について学ぶ姿をみて、自分自身が書いた作文を読んであげたいと思い、皆様に無理なお願いをさせて頂きました。…ですが、もう十何年も前の話になるので半ばあきらめていたのですが、早急に対応して下さい、また作品を残して下さった事がとても嬉しかったです。（後略）



改めて彼女の作文を読み返してみると、高校生の多感で鋭い問題提起が、今また新しい意味をもって、私たちに問いかけてくれる。そこで著者の了解を得て、誌上に再録させていただくことにした。

（文責：瀧口典子）

「私達の誇り」

桐生工業高校2年 松村 綾佳（2002年当時）

世界中には色々な人間が存在します。私はその色々な人間の中から、障害を持つ人間について述べようと思います。

私には、身近に障害を持つ人間がいます。それは六歳離れた弟です。ただ、彼は極めて軽度の障害です。学校へも通い、友達とも遊び、日々を楽しんでいます。こうして外観的な面から見ますと、何ら健康的な子と変わりはありません。しかし、彼は若干の知恵遅れが見られます。それにより彼は、『学習学級』というクラスで勉強しています。学習学級と

は、彼の通う小学校が独自に設置したクラスで、普通のクラスでは勉強についていけない子、少し問題を抱える子を受け入れています。彼は小学校へ上がるまで、ろくに口もきけませんでした。それを理由で学習学級に入ることになったのです。彼に対し、余計なプレッシャーを考えないようにとの、学校側の配慮だったのでしょう。

彼は学習学級の中で大きく成長していきましました。学年に関係のないこのクラスでは、上級生、下級生が共に勉強します。兄、弟のい

ない彼にとって、このクラスは楽しかったようです。面倒を見てもらったり、見たり、本当の兄弟のように仲良くなってしまいました。たったこれだけのことで、彼は一回りも二回りも大人になったのです。少し前まで口もきけなかった彼は、学校から帰るなりランドセルを置くと、すぐに外へ走って行くようになり、よく笑い、そしてよくしゃべるようになりました。私達家族にとっては願ってもみない成長でした。しかし、彼の成長はこんなものではありませんでした。学習学級だからといって、普通クラスで勉強しないわけではないのです。本人達が理解出来る範囲は、普通クラスで学ぶことになっています。それにより、普通クラスの友達もたくさん出来たのです。最近では、特に仲の良い友達が出来、毎日のように遊んでいます。

ここまで良い話ばかりしてきましたが、やはり辛いこと、悲しいこともあります。それは、世間の目、人の目です。学習学級に通う彼、そして彼の家族である私達に向けられる目は、決まって同情の目でした。実を言うと、私も障害に対して同じ目をしていました。「かわいそう」「大変だろうな」正に同情の目を向けていました。それがいつの間にか、私の目は変わっていききました。

つい最近、彼が学校から、障害を持つ人に対するアンケート用紙を持って来ました。保護者が記入するとのことだったので、父がペンを持ちました。私は隣から覗き込み、眉間にしわを寄せました。一項目目の「あなたのお子様は障害をお持ちですか」という問に対し、父は「いいえ」と答えていたのです。確かに彼は極めて軽度ですが、「障害は障害なのでは」と思い、父に尋ねました。すると父は言いました。

「障害なんて持っていない。クラスを分け

るなんて差別だ」

この意見で私は全てを悟りました。このとき父が発した言葉、これこそが差別だと。これこそが世間の目、人の目なのだ。身内が障害を持つことを嫌がり、障害を持つ人間

に同情する。これが差別です。私達障害を持たない人間がのうのうと生きる中、障害を持つ人間は懸命に生きています。それはかわいそうなことですか。同情されるようなことですか。私は違うと思います。むしろ敬うべきこと、称えることなのではないですか？障害を持つ人間は、彼らにしか分からない悩み、苦しみ、悲しみを持ち、障害と共に暮らしています。そんな彼らに同情出切る程、私達は出来た

人間なのではないでしょうか。私達なんかより彼らの方がずっとずっと素晴らしい人間なのではないでしょうか。それに、彼らは素晴らしい能力を持って生まれます。運動面、学力面や芸術面、又、感性や優しさであったりと、内容は様々です。障害を乗り越えながら、その能力を発揮するなんて、すごいと思いませんか。ただでさえ能力を発揮することは難しいのに一。

これらが、私の目の変化の結果です。いつの間にか彼、私の弟が成長すると共に、私も成長していたようです。納得出来ないと思う人もいるかもしれませんが、私なりに良い成長をしたなと感じています。これも彼のおかげなのでしょう。何かをしようとして、したわけではないのに、彼の言動にはいつも学ばされます。特に、彼は優しさを教えてくれます。懸命な姿、素直な心、笑顔、涙、彼の言動全てから、優しさ、優しい気持ちを教わりました。心から彼を称えたいです。

この文章を読んで下さった皆様は、障害に対してどう思いますか。私はこう考えます。「障害を持つ人間は、世界中に存在する色々な人間の『誇り』である」と一。



